



特集

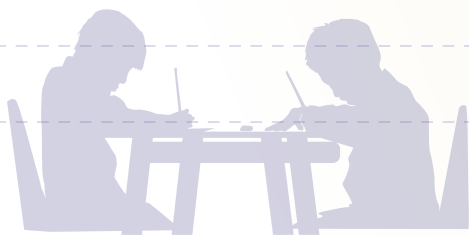
「小6統一合判」 中学入試レポート

vol. 1

保護者の意識と教育の変化から 多様化した入試に チャンスを見出す!

～ 2017年入試結果から探る、2018年首都圏中学入試展望～

皆さんの先輩にあたる受験生と保護者が、2017年の中学入試に親子で挑んだ2月から、すでに2ヶ月が過ぎた。今回は、新6年生になった皆さんが迎える、初めての「小6統一合判」テストだ。前回1月の「小5統一合判」（5年生最終回）のときには、「2017年の入試状況をしっかり見つめて、親子で新たなスタートを!」と述べた。今回は、この2017年の人気動向から読み取ることができる、来春2018年入試の展望をお伝えしよう。



首都圏模試センター

首都圏の私立・国立中の受験者総数は 3年続きで増加して、「44,150名」に！

今春2017年の首都圏中学入試は、前年に比べてわずかながらも受験生数が増加（約450名）に向かい、44,150名（首都圏模試推定による）の受験者総数となって、受験者数と受験率を示すグラフは3年続きで右肩上がりとなった。

2008年のリーマン・ショック後、年々減少してきた中学受験生数は、2014年を境に上昇に転じたことになる。この増加の理由には、やはり「2020年大学入試改革と日本の教育の変化」がある。3年後に迫った「2020年大学入試改革」以降の大学入試のあり方が変わるばかりではなく、今春からの中学1年生以下の子どもたちが大学を卒業して社会に出る2027年以降の日本の社会と人々の生き方は、現在とは大きく変化することが予測されている。

かつてアメリカの学者キャシー・デビットソン氏（ニューヨーク市立大学教授）は、「2011年度にアメリカの小学校に入学した子供たちの65%は、大学卒業時に今は存在していない職業に就くだろうと予測し、マイケル・A・オズボーン氏（オックスフォード大学准教授）は、「今後10～20年程度で、アメリカの総雇用者の約47%の仕事が自動化されるリスクが高い」と予測した。そして前者の言う「2011年度にアメリカの小学校に入学した」子どもたちとは、ま

さに今春2017年4月から中学に入学した子どもたちなのであり、後者が予測した未来は、まさにこの世代の小学生が中・高・大学や大学院を卒業して社会に出る時代に他ならない。

さらには、現在の小学6年生が40歳になる2045年頃には、シンギュラリティ（技術的特異点）という分岐点を迎え、「AI（人工知能）が人間を超える」時代が訪れるといわれている。

急速に進むグローバル化、ボーダレス化とAI（人工知能）の進化と合わせて、現代の子どもたちは今後「答えがひとつに定まらない」人類的な課題と向き合い、その解決の糸口を探っていくなくてはならない世代なのである。

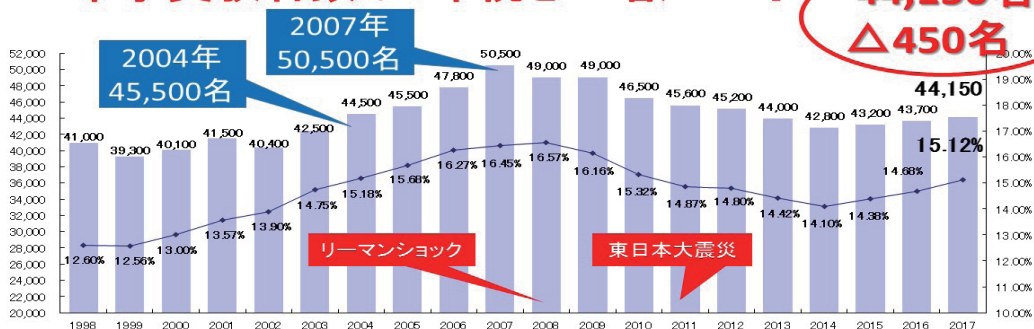
そのように「今後（未来）の社会が変わり、そこで求められる力が変わり、大学入試も変わる」と言われる時代にあって、子どもたちがその時代をサバイブし、より良く生きていくための力を考えたときに、中学受験生の「学校選び」の観点も少しずつ変わってきた。

そして同時に、多くの私立中学校も、今後の「変わる大学入試と日本の教育」への対応の必要性から、自校の教育にもアクティブラーニングの導入や「21世紀型スキル」の育成を積極的に謳うようになってきた。

その傾向や方向性が中学入試にも反映されたひとつの側面が、今春2017年の首都圏中学入試でとくに目立つようになった「私立中入試の多様化」ということになるだろう。

2017年中学入試はどうなったか？

■ 中学受験者数は3年続きで増加へ！



ピーク時から徐々に減少してきた中学受験者数は、2014年を境に下げ止まり、2015年～2017年にかけて3年続きで続けて増加へ！



小学生と保護者の選択肢を広げた 私立中入試の変化！

そうした今春2017年の首都圏中学入試で目立ったトピックスを●ページのコラムでご紹介しておこう。

ここで紹介した、1.「マスコミが一斉に、思考力入試や英語入試など大学入試改革に伴う私立中入試の変化に注目して報道」をはじめとした、それぞれのトピックスは、いずれも最近話題にされることの多くなった「2020年大学入試改革と日本の教育の変化」につながる動きであり、現在の小学生の若い（ミレニアル世代と呼ばれる）保護者の志向や行動様式の変化を反映したものでもある。

そして来春2018年入試でも、こうした動きはいっそう加速され、顕著なものになることが予想される。以下にそうした動きとその背景について述べていこう。

多くのマスコミが一斉に 「私立中入試の多様化」に注目！

今春2017年の首都圏中学入試では、東京・神奈川の私立中入試のスタート日である2月1日の直前～当日にかけて、多くのマスコミがいっせいに「私立中入試の多様化」に目を向けた。この2～3年の間に、中学受験の「新市場拡大」のために、さまざまな形態の「新タイプ入試」が多くの私立中学校で新設・導入され、今年はそれが一段と増加したからである。

その私立中の多様化した入試の形態は、「適性検査型（公立一貫対応型）入試」をはじめ、「合科目・総合型入試」、「記述・論述型入試」、「PISA型入試」、「思考力入試」、「自己アピール（プレゼンテーション型）入試」や「英語（選択）型入試」など、バリエーションは多岐にわたる。それ以外にも「得意科目選択型」や、従来から存在した「帰国生入試」や「推薦・第1志望入試」などの増加も目立つようになった。

これらの新タイプ入試が導入されることで、多様な学校生活や学習歴（習い事やスポーツな

ども含む）の小学生が、私立中を受験～進学することができる選択の機会が広がった。

つまり、こうした多様なタイプの入試（＝多様な受験生を迎え入れることのできる入試）を、多くの私立中が、新たな受験生と保護者との“出会いの機会”として、また今後の日本の教育や大学入試の変化に対応した自らの教育姿勢を反映する“メッセージ”として導入するようになってきたのである。

せっかく私立中学校の側が、そうした新たな受験機会を設けてくれたのであれば、受験生と保護者は、自身（わが子）の得意な教科や強みを生かして、それに合った入試を実施している私立中に、自信を持って挑戦していけばよい。

そうした意味では、この「日本の教育と大学入試」が大きく変わろうとしている時期に、この変化を受けて、中学入試で問われる学力観も変化したことから、入試形態も多様化したと理解できる。多様な学力や才能を持つ小学生にとって「チャレンジできる機会が広がった」とポジティブに受け止めてよいはずだ。

現にこうした多様な新タイプ入試を新設・導入した私立中高一貫校の先生方は、一様に「これまで以上に多様な受験生（小学生）と出会うことができ、記述答案の文章や活動歴、プレゼンテーションなどから、多くの小学生の豊かな資質と伸びしろを感じることができた」と、その確かな手応えを語ってくれている。

そして、こうした中学入試の変化に関心を持ち、報道でスポットを当てたのが、ちょうど現在の小学生の若い保護者（＝ミレニアル世代）



今春2017年入試では志願者の大幅な増加が目立った麻布中の入試風景。

とも重なる、40歳代の若い新聞・雑誌の記者や編集者、テレビ局のディレクター世代だったということも付記しておきたい。

「2020年大学入試改革」が若い保護者には歓迎された！

現在の小学生と保護者の前には、いまから3年後の「2020年大学入試改革」による大学入試の変化という大きな問題が生じている。

今年の中学入試では、この大学入試改革による先行きの不安から、今春入試では「大学付属校の人气が高まった」などということも一部で言われてきた。しかし、この「大学付属校人気」の背景には、むしろ大学受験の準備（受験勉強）にとらわれることなく、アクティブラーニングや多様な体験学習などに時間をかけられる大学付属校が、現代の保護者に歓迎されたという面が大きいだろう。

同じように、今回の大学入試改革と日本の教育改革の方向性が、これまで触れてきた小学生の若い（ミレニアル世代の）保護者には、思った以上に歓迎されているという側面も見逃すことはできない。

何より知識を吸収することが重要で、それが思考力・応用力を高める大前提と考える旧来の「学力観」や、従来のような根強い「学歴信仰」を持たない若い保護者層には、これまでのように「知識の正確さ」を問われる大学入試よりも、むしろ「思考力・判断力・表現力」や「主体性・多様性・協働性」が問われるという今後の大学入試のあり方が歓迎されたという見方ができる。

さらに各大学での個別入試では「創造性・独創性・芸術性」までを求めるといふ、今後の大学入試のあり方に賛同する保護者がすでに数多く存在するという印象さえ受けるようになった。

そうした若い保護者の多くは、自らグローバル企業や、ビジネスの第一線で活躍する働き盛りで、今後の大学入試や新たな教育で求められる力が必要な時代となっていくことを、肌で感じている世代でもあるからだ。

3年後に控えた「大学入試改革」の本格的な実



今春2017年入試でも、女子の最難関の厳しい戦いとなった桜蔭中の入試風景。

施が当初の予定より遅れそうだとか、失速しているといった否定的見解は、むしろ今後の小学生の若い保護者にとっては問題ではなく、すでに“その先を見つめる”保護者が増えていると考えるべきだろう。

カギを握る アクティブラーニングの成否

そして現在の小学生が高校を卒業するときまでには、間違いなく大きく変化するとみられる大学入試と日本の教育。

そこに向かう教育改革の方向性のもとで求められている喫緊の課題が「アクティブラーニング」の導入だ。このアクティブラーニングの定義や解釈が一時は盛んに論議されてきたが、この是非についての論議も、ミレニアル世代の保護者には無用なのかもしれない。

今後の教育の変化に小学生の若い保護者世代の多くが期待することは、「わが子が楽しく、主体的に学びに取り組めるのなら、それに越したことはない」という、率直な感覚・感想なのではないだろうか。

たとえば10数年前の中学開校当初から、「探究学習」を重視してきた埼玉のある私学の理事長は、「勉強が嫌いな子どもという表現があるが、そういわれてきた子どもは従来の一方通行型の講義になじまないだけ。『授業が楽しい』と思えば変わる！」とか、さらには「アクティブラーニングの最大の効用は、同じ教室の友達との意



2017年の首都圏中学入試トピック！《第1弾》

～東京都内を中心に共学校の人気増加が目立つ！～

今春2017年の首都圏中学入試で目立った動きと傾向を以下にご紹介しておこう。

《2017年入試の全体的なトピックス》

1. マスコミが一斉に、思考力入試や英語入試など大学入試改革に伴う私立中入試の変化に注目して報道
2. Web出願システム導入校の増加（142校）もあり、願書の提出はさらに遅くに
3. 2/1AM入試校における「実受験率100%」校の増加（→入学手続き率の上昇）
4. 大学付属校の人气が全体に増加（→早稲田大～日大系列まで）
5. 志願者増で難化する学校と、志願者減で易化する学校との二極化がさらに顕著に
6. 「21世紀型教育」推進校の人气が増加
7. 入試の多様化が加速～英語入試・適性検査型入試・思考力入試実施校の増加
◆英語（選択）入試／65校→95校
◆適性検査（思考力）型入試／85→120校
8. 得意科目選択型入試、推薦入試の実施校数も増加
9. 自己アピール（プレゼン型）入試実施校が東京以外にも登場
10. 帰国生（別枠）入試の実施校数・回数と応募者の増加

《人気増加傾向》

●男子校

- ・麻布
- ・栄光学園
- ・桐朋
- ・芝浦工業大学（豊洲移転）は人気爆発
- ・日本大学豊山

◎共学校

- ・三田国際学園→「のべ志願者総数増加ランキング」トップに！
- ・開智日本橋学園もさらに増加
- ・広尾学園 国際も含めて大幅増
- ・大学付属校の応募者増が全体に目立つ→明大中野、明大明治、明大中野八王子、早稲田、早稲田高等学院、成蹊、学習院女子、立教女学院、青山学院
- ・法政大第二 共学化2年目でさらに増加
- ・明大中野八王子の2/5午後新設「B方式（総合型）入試」に志願者600名以上
- ・日本大学第二、日本大学第三ともに大幅増

- ・東洋大京北 全体増 「哲学教育」思考・表現力入試も人気を集める
- ・かえつ有明 帰国生、思考力入試が増加
- ・新設の横浜市立横浜サイエンスフロンティア高校附属中が厳しい入試に
- ・桜美林 総合学力評価テスト
- ・宝仙理数インター 好調
- ・その他、東京都内では八王子学園八王子、日本工大駒場などが増加傾向
- ・神奈川大附属 増加傾向
- ・関東学院 大幅増
- ・山手学院 さらに増加
- ・横須賀学院 適性検査入試が増加
- ・その他、神奈川では鶴見大附属、桐蔭学院、森村学園横浜翠陵などが増加傾向
- ・市川 増加（新設の英語入試は20名出願）
- ・渋谷教育学園幕張
- ・東邦大学付属東邦 新設の推薦入試に600以上が出願→合格者30名の厳しい入試に
- ・専修大松戸 さらに増加
- ・千葉明德 適性検査 大幅増

その他、千葉では昭和学院、千葉日大第一、二松學舎大学附属柏、日出学園などが増加

埼玉・茨城では大宮開成、開智、栄東、昌平などが増加
その他、星野学園、浦和ルーテル、自由の森、本庄東、江戸川取手なども増加傾向

●女子校

- ・清泉女学院 新設の2/1PM（2科が英語選択）が大人気
- ・トキワ松学園 適性検査型入試が大幅増
- ・八雲学園 未来発見入試が人気集める

その他、都内では東京女学館、十文字、田園調布学園、三輪田学園などが人気増加

- ・聖園女学院 新設の総合力テストが人気を集める
- ・鎌倉女学院・横浜共立学園が人気増

その他、鎌倉女子大、捜真女学校などが人気増加傾向

千葉では国府台女子が増加傾向

見や考えの違いを認め合うことで、互いに『自己肯定感』が高まること」と明言している。

実はこうした考えに反対する小学生の保護者は少なく、否定的意見を述べているのは、大半

がそれより年上の、すでに子育てを終えた世代の教育関係者ばかりといってもいい。

もちろん、最近ではどの学校もアクティブラーニングの導入を謳うようになったことから、ど

この学校が本当の意味での主体的・能動的な学びのスタイルを実践できているのかわかりにくい面もある。

それを見極めるために、なるべく多くの私学に足を運び、保護者が自身の目でそれを判断することが「学校選び」にあたって大切な時代になってきているのだ。

ICT教育にはまったく 違和感を持たない親世代

アクティブラーニングと同様に、いま教育現場での喫緊の課題とされる「ICT教育」の導入についても、現在の小学生の若い保護者世代と、それ以前の世代とは受け止め方が違う。

ミレニアル世代の保護者は、すでに高校生～大学生の頃から、世の中にPCが広く普及し始め、携帯電話も普及した時代に学生時代を過ごしてきた世代。Web（インターネット）利用は当たり前。社会人になってからはノートPCやモバイル機器も普及し、やがてはスマートフォンやタブレットを何ら抵抗なく使いこなすようになった世代でもある。

そしてその子どもたちである現在の小・中・高校生のスマホ普及率は、全国的にも80%を超えたとさえ言われている。

そのように、仕事でもプライベートでもPC、スマホ、Webを日常で使ってきた世代の保護者であるがゆえに、中学入試の世界にも、一気に「Web（インターネット）出願」システムの導入校が増加し、今春2017年入試では、首都圏の私立中の約半数近くの142校もがそれを導入した。

そうした世代の保護者が、中高一貫校での「ICT教育」の導入に理解を示さないはずはない。リアルタイムで情報を共有し、教室での学びのなかでもクラスの仲間の意見や考え、作品などを瞬時にシェア～共有することで、アクティブラーニングを速やかに進めるための手段・道具として、わが子がそれを使いこなすことに抵抗感を持つ保護者は、ほとんどいないと思われる。

むしろ保護者世代が携わるビジネスの世界で

は、そうした道具を使って互いに理解を速やかに深める力や技術が求められている。

私立中高一貫校のなかには、すでに生徒一人に一台のタブレット（iPadなど）を持たせ、しかも学内無線LANによる利用に限られたWiFi型ではなく、登下校の途中や自宅でも使えるセルラー型のiPadをあえて持たせる学校も登場していることに注目したい。

「21世紀型スキル」の育成は 時代の要請

また、この2～3年でとくに注目されるようになった「21世紀型教育」も同様に、現在の小学生の若い保護者世代からは歓迎されている。

この「21世紀型教育」を私学のなかでも最先端のレベルと充実度で実践する三田国際学園が、共学化から3年続きで今年も大きな人気を集め、ついに今年は学校別の「のべ志願者数増加順ランキング」でトップになったことにも、そうした志向が反映されている。

いまのところ日本国内で「21世紀型教育」という表現で新たな教育の導入～実践を真正面から謳っているのは、「21世紀型教育機構（旧・21世紀型教育を創る会）」に加盟する10数校の私立中高だが、IB（国際バカロレア）プログラムを導入したり、その学びの要素を自校のオリジナルな教育プログラムに取り入れ、新たな学びのスタイルの導入に踏み出している私学はほかにも数多い。

欧米では「21世紀型スキル」という表現がす



昨年2016年から急速にICT教育環境を充実させ、進化を図っている城北教育中環の授業。



来春2018年の入試トピック！《第1弾》

～青山学院横浜英和、八雲学園が共学化！～

■八雲学園が共学化。

横浜～東京エリアの男子の動向に注目！

八雲学園（東京・目黒区。女子校）は、来春2018年入試から共学化することを、2月20日に同校Webサイトの「共学化のお知らせ」のページで公表しました。



男女共学化

2018年
4月から
中学校

- 時代に先駆けて取り組んできた
グローバル教育
- 多様な体験のプログラムを通した
感性教育

2017年ラウンドスクエアに加盟
※40ヵ国170校が所属している国際私立学校連盟



八雲学園中学校高等学校

〒152-0023 東京都目黒区八雲2-14-1 TEL: 03-3717-1196 FAX: 03-3717-1197

八雲学園（東京・目黒区。女子校）は来春から共学校となるため人気動向が注目される！

1996（平成8）年の中学再開から現在までの20数年の間、「破格の英語・グローバル教育」と「豊かな体験・感性教育」などで定評のあった八雲学園。学業だけでなく、スポーツや芸術活動で活躍を見せる生徒も多い、活気あふれる私学です。共学化にあたっての新たな方向性や詳細は5月に公表される予定ですが、受験関係者の間では人気動向が大いに注目されています。

東急東横線・みなとみらい線「都立大学駅」から徒歩7分程度の交通至便な立地にあることから、渋谷（東京）～横浜（神奈川県）エリア間の男子受験生の人気をどれだけ集めるかが注目されます。近隣の人気校、三田国際学園や東京都市大学等々力などと併願するケースが増えてくとも考えられます。

■青山学院横浜英和が共学化。

男子の人気をどこまで集めるか？

2016年4月から正式に青山学院大学の系属校となり、新たな歴史をスタートさせた青山学院横浜英和（前校名は横浜英和女学院）中学校（神奈川県・横浜市。女子校）。この青山学院大学との系属校提携が公表された2年半前から女子の受験生の人気が急上昇。中学入試の難易度も3年続きで上昇してきました。

そして来春2018年4月からの共学化によって男子受験生を迎えるにあたり、青山学院横浜英和では来春2018年入試から、①「入試を全回とも4科目に」、②「2018年度の新入生から1クラス増の5クラス編成に」、③「男子の制服は2017年春に発表。女子も若干の変更をする予定」という一連の改革を行うことを、同校のWebサイトで公表しています。

もともと高校での募集をしない完全中高一貫校でしたが、さらに男子受験生にも門戸を開いたことで、この2～3年で急上昇してきた女子の難易度はさらに上昇し、男子の入試も高いレベルになることが予想されます。

でに教育の世界でも当たり前のように使われているにも関わらず、日本ではまだ“少数派”にとどまっていることのほうが、むしろ不思議なことといえるだろう。

先進国の技術や文化を導入することで国力を高める、いわば“キャッチアップ型”の教育が求められたのは、すでに過去のこと。今後は「正解がひとつに定まらない問い」について、多様な国々の多様な意見を持つ人々と話し合い、協調・協働して、環境保護やエネルギー不足、紛争や貧困の撲滅、持続可能な社会の構築といった、世界的な課題の解決の糸口を探っていける力が、

未来を生きる子どもたちには求められている。

そういう「21世紀型スキル」の育成は、教育の現場における世界的な課題であり、“時代の要請”であると考えておくべきだろう。

洗足学園がフェリス女学院を上回った 今春2017年入試の結果偏差値。 学校難易度も下剋上受験（？）に！

そして今回4月度の小6「統一合判模試」では、この2017年入試の結果偏差値を、首都圏模試センターから初めて公表している。

来春2018年の入試トピック！《第2弾》

■巣鴨が2/4にⅢ期入試を新設し、3回入試に！

巣鴨中学校（東京・豊島区。男子校）が、来春2018年入試では2月4日に第Ⅲ期入試を募集定員40名で新設し、これまでの2月1日の第Ⅰ期（定員120→100名）、2日の第Ⅱ期（定員120→100名）に加え、計3回入試を実施することを、3月20日に同校Webサイトの「巣鴨中学校 入試日程の変更について」というページで公表しました。

5年前の2012（平成24）年から新校舎建設工事を開始し、数年間は仮校地へ移転していた同校ですが、2015（平成28）年には中央新校舎（6階建教室棟）及び北新校舎（5階建特別教室棟・図書館）が同時竣工。昨年2016年からは、旧校地にリニューアルされた新キャンパスと新校舎で、新たな学園の歴史をスタートさせています。

生まれ変わった新しい教育環境で、国際教育を含む同校独特の「硬教育」と「英才早教育」が、今後の小学生の若い世代の保護者にどのように受け止められるか注目されます。

■共立女子が2/3PMに「英語インタラクティブトライアル入試」を新設！

共立女子中学校（東京・千代田区。女子校）では、来春2018年入試から2月3日午後1時に『英語インタラクティブトライアル入試（略称「インタラクティブ入試」）』を新設します。

この『英語インタラクティブトライアル入試』は、「英語を媒体とする主にゲームや対話を通して、英語の理解力や英語を用いての行動力等を図る試験＝『英語インタラクティブトライアル』（100点満点、40分程度）」と、『算数』（50点満点、30分）の二つの試験によって行われるとのこと。

このほかにも共立女子中学校では、来春2018年入試で、①「海外帰国生入試」の変更（「英語入試の導入」ほか）、②「2/1入試（A日程）」「2/2入試（B日程）」の募集人員の変更、などの入試改革が行われます。

昨年2016年入試では、2月4日のC日程入試に「算数＋全科型論述入試」を導入し、今春2017年入試では、その実施日を2月3日に移行して、募集定員を30名から40名に増員し

て話題を呼んだ共立女子中学校が、続く2018年入試でもまた新たな改革に踏み出していることが注目されます。

■大妻中野が2/3に「算数（1科目）入試」を新設。コアコースを廃止して2コース制へ！

大妻中野中学校（東京・中野区。女子校）が来春2018年入試では、2月3日に算数1科目入試を新設し、これまでのコアコースを廃止して、アドバンスコースとグローバルリーダーズコースの2コース制とすることを公表しています。

同校は、2013（平成25）年に最新のICT環境を整えた新校舎を完成させて以来、2015（平成27）年にはSGH（スーパーグローバルハイスクール）アソシエイト校指定を受け、ICT環境での授業実践を開始。翌2016（平成28）年から生徒は一人一台タブレットを所有。この年から「グローバルリーダーズコース」新設し、「グローバル入試（英・国・算）」を新導入。そして今春2017（平成29）年には「新思考力入試」新設。「グローバル入試」を1回→2回に増設するなど、矢継ぎ早に改革を重ねてきました。

そして来春2018（平成30）年からはコアコースを廃止。「新思考力入試」を2月1日へ移行し、2月3日に「算数入試」を新設するという、ダイナミックな入試改革、学校改革に踏み切ります。



毎年改革を重ね、今年度はさらに授業を進めようという大妻中野。注目の授業改革だ！

そこで、男子校では豊洲の新キャンパス移転で生まれ変わった芝浦工業大学附属、共学校では3年続きで人気を増加させた三田国際学園などが、結果偏差値が5ポイント以上も急上昇し、当初の予想を大きく上回る結果が見られたことを付記しておきたい。

なかでも今回驚かされたのは、神奈川の女子校で、洗足学園②の入試結果偏差値（→74）がついに、従来の最難関・フェリス女学院の入試結果偏差値（73）を上回ったことだ。

将来の社会で求められる力が変わり、大学入試と日本の教育が大きく変わろうとしているいま、中学入試における各中学校の入試難易度や各私立中高一貫校の教育内容も、また大きく変わろうとしている。そしてその変化のなかで、「わが子にとってベストの学校選びをしていく」ことが親の最も大切な役割だ。

そのための情報収集と現状分析～受験校選択のためにも、この「統一合判模試」を上手に活用していただきたい。